

ごあいさつ Greeting

『ヨカケアおおむた』第3作目を手に取っていただき、ありがとうございます。
また、ご協力いただいた皆様、制作に携わってくださった方々に心より感謝申し上げます。
今年度は、新たな試みとして大牟田高校の学生たちが取材に参加し、介護サービスの現場に足を運びました。彼らの目を通して、介護の現実や魅力がどのように映ったのか――。若い世代ならではの視点が加わり、これまでとは違った角度から介護について考えるきっかけとなる内容に仕上がっています。
本作のテーマは「つながる介護」。

表紙に描かれた小さな手と大きな手が象徴するように、介護は一方通行のものではなく、世代を超えて受け継がれ、つながっていくものです。幼い頃に支えられた人が、成長して支える側へと移り変わるように、介護もまた、人生の中で自然と繰り返される営みなのかもしれません。
介護の仕事に携わる人々がどのような想いで日々向き合っているのか、それぞれの語りから、その奥にある情熱ややりがいを感じ取っていただければと思います。そして、この冊子が、介護の現場をより身近に感じてもらうきっかけとなれば幸いです。

大牟田市介護サービス事業者協議会 会長 井田 謙



表紙の写真



つながり、隔りをなされる人の営み

編集後記

介護の仕事の魅力を発信していく、とのスローガンを掲げてスタートしたヨカケアの発行も三回目を迎えることができました。今回モデルとなっていたいただいた方や初回、二回目にモデルとなっていたいただいた方、その他、作成や発行にあたって様々にご協力いただいた全ての方々にはまずは感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

現在、わが国における介護の状況は大変厳しく、中でも人材の不足については深刻なものがあります。介護の仕事の素晴らしさを、よりしっかりと伝えていくにはどうしたら良いか、何が必要なのかと考えた時に、仕事そのものにスポットライトを当てるのではなく、実際に現場で働いておられる方をフォーカスするというテーマになりました。

私は、要介護状態となること、そしてその方を他の誰かが介護していくということは、とても普遍的なことだと感じています。ですから、介護職の存在は生活便用品ではなく、すでに必需品となっているはずで、それが不足している状態が今後も続くことになれば、社会がどうなっていくのかというのは想像に難くありません。そんな環境を少しでも変えていくため、このプロジェクトが有意義であると確信しています。

重ね重ねになりますが、今この『ヨカケアおおむた』を手に取って読んでいただいている皆様、『ヨカケアおおむた』に関わっていただいた全ての皆様、本当にありがとうございました。

実行委員長 松井 直澄

【ケアニン発掘プロジェクト】 松井 直澄／後藤 かずさ／平尾 武久／古賀 正吾 (組織広報部会 部会長 菅原 知之)

大牟田市介護サービス事業者協議会

| 加盟法人 |

株式会社あすか介護サービス／社会福祉法人甘木山学園／医療法人寧知会／有限会社有明ケアサポート／一般社団法人大牟田医師会／公益財団法人大牟田医療協会／社会福祉法人大牟田市社会福祉協議会／医療法人福岡輝生会／医療法人けんこう兼行病院／医療法人完光会今野病院／社会福祉法人キリスト会奉仕会／株式会社社銀水会／医療法人恵愛会／社会福祉法人けんこう／社会福祉法人原交會福祉会／社会医療法人弘恵会／重藤内科・外科／医療法人寿心会木村内科医院／医療法人橘仁心会たちばなクリニック／有限会社心介／社会医療法人親仁会／医療法人信和会／医療法人静光園／医療法人くさかべ病院／社会福祉法人それいゆ／社会福祉法人天光会／医療法人東翔会／社会福祉法人東翔会／医療法人富松記念会／株式会社西日本医療センター／株式会社ニチイ学館／社会福祉法人博愛福祉会／社会福祉法人福岡寺福祉会／医療法人福寿会／医療法人睦月会堀整形外科麻酔科クリニック／社会福祉法人木犀会／有限会社モルゲン・ハチジューハチ／やまなみ介護生活株式会社／医療法人悠久会／株式会社ゆうわ／有限会社ゆとり／社会福祉法人グッドタイムズ／株式会社あうる／医療法人サンステップ／株式会社あうる／医療法人静光園第二病院／有限会社ふれあい／株式会社福祉サービスサカタ／有限会社宅老所ことこの葉／麻生介護サービス株式会社／社会保険大牟田天領病院／社会福祉法人大牟田市福祉事業協会／医療法人吉田クリニック／有限会社北村／医療法人CLSすがはら／医療法人藤吉会／株式会社シャイニングライフ／社会福祉法人あらぐさ会／株式会社リード／株式会社おもてなし／株式会社Saita／一般社団法人IKEDAYA／伊藤商事有限会社／合同会社Leaf stone／社会福祉法人大川仁仁会

Y O K A C A R E O M U T A

ヨカケア
おおむた

We are now in the 21st century and heading towards a super-aging society.

However, it is difficult to say that an excellent nursing care system has been established.

There are many problems such as wages and work-life balance because various nursing care workers are involved.

Nonetheless, nursing care workers find joy and pleasure in their work because they take care of people.

The work that supports people gives us precious awareness, learning, and the power to move on to the future.

We interview a wide variety of nursing care workers

who are active in their field and approach their thoughts and reality there.

10の生きる介護
THE FUTURE OF CARE IS THE FUTURE OF US.



特集

ヨカケアおおむた
×
大牟田高等学校

3

通所リハビリテーション 嶋田 昌弘 の場合

5

通所介護 北村 優駿 の場合

6

特別養護老人ホーム 山口 芹果 の場合

7

通所介護 清田 綾 の場合

8

小規模多機能ホーム 川本 純子 の場合

9

訪問看護 鍬本 亜弥 の場合

10

福祉用具貸与 斎田 豪堅 の場合

11

介護老人保健施設 西田 菜美 の場合

12

短期入所生活介護 福田 真一 の場合

13

通所介護 松崎 あずさ の場合

14

10の生きる介護

CONTENTS



21世紀の今、私たちは超高齢化社会へと歩みを進める。しかし介護の現場は、十分整っているとは言い難い。さまざまな人が対象であるがゆえの問題、資金、ワークライフバランス…。課題は山ほどある。

それでも、介護の現場には人が相手であるからこそ喜びや魅力がある。人そのものを支える仕事は、私たちにかげがえない気づきや学び、未来へ進む力を与えてくれる。ここでは、介護の現場で活躍する多様な人々取材し、そこにある彼らの思い、そしてその実際に迫る。

ヨカケア

お お む た

INTERVIEW

本日は大変お疲れ様でした。まず嶋田さんに伺いたいのですが、人と関わる仕事って、必ず予想した通りにはならないと思うんですよ。予想しなかったアクシデントなどに直面した時の気持ちとか、その時に自分だったらどう考えてどのようなアクションをするというのがあれば教えてください。

嶋田 まず人が相手でトラブルがあるっていうことは、その人が嫌なことを感じたり違和感があって摩擦が起きると思うので、まずは相手の気持ちを察するというか、相手の話をまず聞くことかなと思いますね。例えばクレームがあった場合に自分の意見を先に言ってしまうと、相手もそこに乗ってこられるんですよね。なので、まずは相手の話をしっかり聞くということがポイントかなと思います。その時に相手が、例えば嫌なことをされてすぐ腹を立てておられたとしても、それを口にして出したら割とスッキリされるんです。そうしたときに、今回はすみませんでした。今度からこうしていきましょうって話をするとその場は割と落ち着くという印象はあります。

介護の仕事でも、例えばレクリエーションをするのが嫌だっていう方がいたり、保育士さんの場合だとピアノが嫌とか。嶋田さんの場合、そういったことをどのようにして乗り越えてこられたのでしょうか。これからはきっとみんなもそれぞれ苦手とか、嫌なこととかあると思うんです。そんな時どうやって乗り越えていくと良いかといったアドバイスがあれば教えてください。

嶋田 笑いヨガ(5ページ参照)の場合だと、別にレクリエーションのためにやったというわけでもなかったんです。面白そうだからと思ってやって、それで実際の仕事でも使えるかなというところで。だから乗り越えるというか、まさしく縁ですよね。集団体操を苦手としていたんですが、笑いヨガに出会ってから、関わり方というか、意識がちょっと変わったのは事実です。おそらく笑いヨガに利用者さんが喜んでくれたから乗り越えられたと思うんです。何かあった時に、今はインターネットの時代で何でもすぐに調べられるじゃないですか。まずは苦手だなと思ったら、自分が好きになれそうなジャンルで良いと思うんですが、そういったものをちょっと調べたりですね。その中で、これだったら使えそうだと思うものがあたら、職場の人や上司の方とかに、こういうのをやってみようと思うんですけど提案してみる。いいねってそれがもし通ったら、それは良かったって感じられると思うんですよね。その結果、利用者さんが喜んでくれたとか、身体の動きが良かったとか、そういう利用者さんからのフィードバックが得られると苦手意識はなくなると思います。むしろやりたくて仕方なくなるかもしれません(笑)。

生徒 この仕事をする上で、利用者さんと信頼関係を築くために1番大事にしていることを教えてください。

嶋田 そうですね、信頼関係という意味ではやっぱり基本の挨拶ですかね。挨拶と言っても、ただ「おはようございます」と言ったりするだけではなくて、利用者さんの目を見て挨拶する。そして帰られる時は「ありがとうございました」とお辞儀をする。この始まりと終わりの挨拶はとて

× 大牟田高等学校



も大事なかなと思います。受け答えですね。意識すれば誰でもできると思うんですが、簡単にできる割におざなりになってしまいがちです。だから相手の目をしっかり見て話とか、そういったのは大事なかなと思います。また、利用者さんのことをより良く知ろうとする気持ちも大事だと思います。それと僕がちょっと個人的に大事にしているのが自分自身が楽しそうにしていなくて、信頼関係が得られない気がするんです。やはりそういうのって伝わるんですよね、相手に。楽しそうに仕事ができるというか、明るくというか、前向きに仕事をする、その辺りは結構大事なかなと思います。

利用者さんへの声掛けや挨拶もそうですけど、ありふれているようで意外となかなかできないですね。当たり前のことを日常的に続けられるようにするにはどのようにしたら良いですか？

嶋田 実は、以前の職場で結構そこは厳しく指導されたんですよ、利用者さんに対してです。例えば利用者さんに対して単におはようございますって言うのではなくて、「〇〇さん、おはようございます」と、きちんと名前を覚えなさいと言われて。僕がなかなか人の名前を覚えるのが苦手な方で、時間がかかってしまったんですが、言葉ってやっぱり相手に伝わるというか、影響するんですよ。身体だけではなくても言葉も影響するので、その辺は結構厳しく鍛えられました。利用者さんたちに限らず、誰でも自分を大切に思ってくれているかどうかというのは気になりますもんね。

「利用者さんのことを知ろうとする」ということについて。

嶋田 例えば利用者さんについて伺ってメモしたりもするんですけど、これはひと言で言うと“質問力”というか、投げかける力とでもいうのか。普通に相手の話を聞くとていうのも大事だけど、返してくれている話の



流れを止めないというか、そういったことも大事だと思っています。今日、生徒さんにいただいた利用者さんへのインタビューでも、結構話されましたよね。みんな普段黙々とリハビリしておられますが、心の中で思っていることとかあるというのは何となく分かるので、そんな時は思いを伝えていただくスペースを自分の中に持つというところですかね。人の話を聞くために、まず自分のことを話して、それをきっかけに相手の話を伺うこともあります。

生徒 専門用語が難しくて覚えられません。どうしたら覚えられますか？

嶋田 専門用語は資格を取るというときに必然的に覚えてしまいます。介護福祉の方でも国家試験とかもありますし、徹底的に知識としては入ってくることは多いとは思いますが、あとは実際に使うかどうか。やっぱり使わないと忘れてしまいます。だからアウトプットが大事なかなと思います。覚える自信がないというのはまだ仕事をやっていないからです。一旦は頭で覚えなさいといけなさいと思いますが、それを実践することもあるし、普段から使うことかなと思いますね。

2024年12月、大牟田高等学校で福祉を学ぶ4人の生徒さんたちが市内にある通所リハビリテーションの現場を体験し、利用者さんや職員さんとふれあいました。話を伺ったのは理学療法士の嶋田さん(5ページ参照)。
実際に介護の現場を見た4人はどんな印象を持ったのでしょうか。
また現場で働く職員さんは、未来を担う子どもたちにどんなことを伝えたのでしょうか。
ここでは体験を終えた直後に実施した嶋田さんへの質疑応答の一幕と、改めて4人の生徒さんによる座談会の様子を紹介します。

座談会

まずは皆さんが福祉の仕事を目指そうと思ったきっかけを教えてください。

裨田 私は中学生の時に実際に施設に行って福祉体験学習という授業を受けたときに、なんだか人のためになれたような気がしてそれが楽しく感じて介護の道へ進もうと思いました。

村野 私は小さな頃からおばあちゃんやひいおばあちゃんと一緒に暮らしていて、病院に通ったりお世話をしたりすることがあったんです。そこで両親やおばあちゃんに、介護とかそういった仕事をしたら良いんじゃないかと言われたことがあって自分もそう思っていたんです。でも、大学のオープンキャンパスに行った時に介護だけじゃな

くて、その人が自分で生活できるようにする、といったようなことを学んで、介護職だけでなくその人が自分で自立した生活できるようにリハビリをする、そういう仕事が良いなと思って目指しています。

猪口 中学校の頃におじいちゃんが自宅で寝たきりの状態になってしまって、その時に元々おじいちゃんとは小さな頃から一緒にいたりして仲が良かったというか、信頼できる関係だったんです。いなくなってしまう後で、まだ自分ができたことがあるんじゃないかとすごく心残り。おばあちゃんや親がそうだった時に自分にできることってないかなと思って。介護職の母親がおじいちゃんの介護をしているところとか見ていて、憧れていたうか、そういう風になれたらいい

なって感じ。実際にお母さんが仕事をしているところを見たことはないんですが、人と関わって良いなと思います。

福田 私のおばあちゃんは杖や車椅子がないと一人で移動することができなくて、誰かがいないと外にも出れないんです。日々をもっと楽しく過ごしてほしいと思っていて、何かサポートできることがないかなと考えた時に、叔母さんが介護職なので、そんな仕事もあるんだなと思って。

なるほど、皆さんそれぞれご家族とか何かしらのご経験があるんですね。実際の現場も体験していただいたんですが、改めていかがでしたか？

裨田 見学でついた職員さんがとても印象的でした。理学療法士になったのが体が大きいからっていうのはちょっと意外でした(笑)。また利用者さんにインタビューした時、その方も大牟田高校(以下、大高)卒で、私も大高で、同行していただいた斎田さんも大高で3世代の会話になったりとか。それがとても印象に残ってます。そんな高校の先輩方がしっかりと現場で仕事しておられるっていうのが良いなと思いました。

村野 職員さんが対応をされている時に、その日に来られた利用者さんに対して「〇〇さんおはようございます」とか「こんにちは!」みたいな感じで挨拶をしっかりやってもらったのがすごく印象に残りました。もし自分が利用者さんの立場だったらなんだか嬉



嶋田 夢美



猪口 祥斗



村野 沙里衣



嶋田 航大

しくなりそうだし、ちゃんと挨拶をするっていうのは、当たり前かもしれないけど、大事だなと感じました。

そう言えば、猪口さんが似たようなことを仰っていましたね。

猪口 こっちに動きますねとか、あっちに動きますね、といった声掛けですね。普段実習の時とかに絶対言われてることですが、現場で実際にきちんとやっておられて、それがすごいなと思いました。

それが意外だったんですよ。そこに反応してくれるんだみたいな。僕たち介護側からすると、仕事の良さや楽しさを伝えていこうって思いがなんですが、そうではなくて、きちんと挨拶や対応を大人が丁寧にやっている姿を見せることが案外響いてるっていうのがですね。

猪口 その時はストレッチみたいなことをされていたんですけど、自分と話をされてる最中

も利用者さんに対して痛くないですかとか、これどうですかとか気を遣っておられて、それがすごいなと思いました。それができるといことは、普段からそういう風になっておられるってことだと思いますし、積み重ねて大切なんだなって思いました。

皆さん方がこれからどんな仕事をしていきたいと思われているのか、何を目標にしているのかを教えてください。

裨田 私はこれから関わるどんな人も笑顔にさせたいっていうのがあります。介護していてもやっぱり楽しい方が良い。どんな人でも笑顔にできるような仕事をしていきたいです。その中で今回体験させていただいた中で感じたのは、日々の会話をできるだけ覚えていくこと。スタッフさんも「〇〇さん、こういうことありましたよね」みたいな会話をしっかりとっておられるので。

村野 仕事をするからには、しっかりとその人の課題というか、その人に合ったリハビリを

提供できる作業療法士になりたいです。見学に行った時に伺ったんですが、やっぱり自分も表情が表に出ちゃうというか、明るく感じてっていうのが少ないので、そうすると利用者さんも楽しくありません。利用者さんが実際にリハビリする時に「みんなが明るかったり元気だったりすると自分もリハビリをやって良かったなって思う」と言われていたので、笑顔でいるとか、明るい人になれるような感じの人になりたいです。

猪口 自分は利用者さんとの信頼関係が本当に大切だと思っていて、やることはしっかりとやるんだけど、介護する人と利用者さんっていうだけの関係じゃなくて、なんか家族とていうか、そういう信頼関係を作れるような人になったら良いなって思います。

福田 私はこの春、柳川療育センターへ就職することが決まっています。まずは相手の立場に立って発言や行動。利用者さんに楽しく生活してほしいので、明るく元気に頑張っていきたいなって思います。

5年や10年後の自分の姿は？

福田 私は介護福祉士の資格を取ってめっちゃ働いてます(笑)。

猪口 やることはちゃんと覚えていって、気を緩ませることなく現場に行けるような人になりたいって思います。

村野 大雑把ではあるんですけど、まずは無事に作業療法士の資格をちゃんと取って、安定して仕事ができるとう良いなと思います。

裨田 僕はその人のためにしっかりと動いていくと思います。ただ仕事をこなすのじゃなくて、自分の性格を出していく感じで仕事してそうだなって思いました。自分らしく。

それでは皆さん、これから頑張ってくださいね。本日はありがとうございました！

理学療法士・嶋田さんの1日は利用者の送迎から始まる。利用者のリハビリや訓練のサポートが主な業務だ。午前中に1セット、午後2セット、夕方以降は事務仕事だ。担当者会議で連携に携わることもある。木曜日は地域で住民への運動指導だ。「例えば肩が痛いとか、首が痛いとか、身体のことによって困るとか、そういうことで悩まれている方もいらっしゃる。ただ家にじっとしてではなく、こういうところに来るとすごく元気になるからとか色んな方が来られます。だから視野が広がるっていう印象があります。かつ自分が持っているスキルとかそういったことも伝えられることがあるので、通所リハご利用の方とそ地域の方での引き出しと言いますか、自分の持っているものを様々な形でアウトプットできる場所としては非常に面白いかなと思っています」。

岡山の専門学校へ進学し、資格を取得した嶋田さんが最初に勤めたのは脳卒中後遺症の患者が多く入る病院だった。「片麻痺の方のリハビリに力を入れている病院で、割と講師を務めるような先生とかもいらっちゃったところだったんです。その方の元であれば、脳卒中の方のリハビリの方法をしっかりと体得できるのではないかな、そういう期待も込めつつ入りました。その病院で約4年程お仕事をさせていただくうちに、麻痺が残った状態でも自分らしく生活するとか、福祉用具を使ったりとか、環境整備とか、そういったことで利用者さんがより良い生活を送れるようにと思えるようになりました。これは当時の先輩に教えてもらったことが大きいですね。歩けなくても自分らしく生活できることを考えていった方が良いとか、そのようなことを色々教えてもらいました。その時に、今では少し当たり前になってきてるんですが、障害を持った状態で社会参加をいかにしていくかみたいな話を教えてもらって、そういう状態でもいかに日々を楽しんでやっていくかみたいな、そういうことが大事なかなっていう風に思うようになりました」。

「笑いヨガ」。嶋田さんが日常の業務に取り入れた体操だ。「京都の老健にいた時に知り合いが紹介してくれて。笑いヨガってのがあって良いよっていうことで。当時、集団体操を仕事で頼まれたりしていたんですが、苦手だったんです。笑いヨガって、こう、ハハハと笑いながら運動するんですが、それをYoutubeで調べたりDVDや本を買ったりして、見よう見まねでレクリエーションの時やってみたら結構ウケたんです。当時の職場で定期的に講演とかやってもらったりしていたんですが、そこで笑いヨガをやってよって。これは本格的に勉強しなきゃいけないって思っ、1泊2日の笑いヨガリーダー養成講座っていうのがあって行って資格取って。そうしたらその後も地域の方向けに講座やるようになったり広がっていきました。ストレスを吐き出すようなものもありますし、手の運動をしながら、

足を蹴りながらやるものもあります。笑いヨガをすることで自己肯定感も上がってくるし、気分も良くなるし、結果的に考え方がポジティブになる。日常生活で使うとするならば、例えば嫌なことがあっても、わざと笑ってみるとかですね、そういうことに結構使えるかなと思いますね。なんかリセットされるというか、ポジティブでもネガティブでもなくて、ゼロになる感じですね」。

これまで医療・介護など、様々な分野や地域で経験を積んできた嶋田さん。大切にしていることは、まずは自分自身が楽しくやれているかということだそう。現在の職場では通常業務に加えて、モデル事業の担当を任されることも。「大変なこともありますけど、その経験とかそういったものが大事なのかなとは思っていますね。新しいことにチャレンジして、そこでどんな経験をしていくのか。『自分の命が喜ぶこと』をやるということ。そういうことと向き合って、なんでもやっていった方がいいかなと思いますね」。



通所リハビリテーション

嶋田 昌弘 (40歳)

医療法人 OLS すがはら 通所リハビリテーション所属
理学療法士
大牟田市出身。岡山の専門学校を卒業後、病院や介護老人保健施設ほか、デイケア、訪問リハビリテーション、リラクゼーションなど多岐にわたる業務に携わる。最近の趣味はサウナ通い。

自分の命が喜ぶことをやる

MY LIFE

北村さんの前職は全国展開する飲食チェーンの主任だ。学校を卒業して就職、地元で働いた後に関東へ転職した。「アルバイトをやっているうちに、そういう接客ってやっぱり自分好きだなっていうのがあって10年働きました」。そして中学の頃から大の千葉ロッテマリーンズファン。「関東に住んでいた頃は試合があるとよく見に行っていましたね」。最後に配属された栃木の店舗からUターンして来たのは4年前、29歳の時だった。時はちょうどコロナ禍の真っ最中、勤める施設も例外ではなかった。そこでクラスターが起った。利用者やご家族はもとより、施設自体も危機的な状況となる。祖父も罹患し病院に運ばれる中、戻ったばかりの北村さんは昼夜通して利用者を見守り、掛かってくる電話に対応した。3週間の営業停止。そこで北村さんを支えたのはひたむきな冷静さだった。10年勤めた飲食店は厳しい現場だった。その中で見出した冷静で建設的な対応力が北村さんの自信となった。「冷静になって思ってます。普通に冷静。冷静に物事を見ると何かあったとしてもしっかりと対処できるんです。倒れたから慌てるとかじゃなくて、すぐに声をかけて、意識があるかとか脈が増えてるかとか、応援が必要かどうか」。

子どもの頃は学校でクラス委員、5人兄弟の長男で面倒見の良い北村さんは兄弟や仲間と野球をするのが大好きだ。「結構体力が付くんですよ、タバコも吸わないし。夜勤は長丁場なので、やっぱり体力勝負なところもあって」。北村さんは夜勤専

従、ここで役立っているのが准看護師の資格だ。祖父母に勧められたのがきっかけで取得した。「仕事しながら、夜勤しながら実習とかも行ってましたし、学校も行ってましたし、結構ハードでしたね。でもやっぱり生活もあるので、結婚して生活して、学校行きながら働いて2年頑張りました。そこはもう

通所介護

北村

一つ自分の強み、自信でもあります」。「この前ちょうど見守りをしている時に急変を起こした利用者さんがいて、自分なりに冷静にバイタルをすぐに測って。そして救急隊に電話して。やっぱり准看護師の知識があると全然違いますね」。

家族が経営する事業所の介護士である

ようかなとは思っています。特別養護老人ホームでのダブルワークも続けている。そこで経験する、より良いと思える介護の形はどんどん参考にしていきたいと言う。未来を支える若い介護士は、冷静そして熱心だった。

北村さん。「帰るねって手を振ったら、ありがととか気を付けてねとか、利用者さんにそういった温かい言葉をかけてもらえる。今日ご飯美味しかったよとか、そういうのがやって良かったなって思います」。「まだまだ自分とは与えられた仕事、任せてもらえることは任せてもらって。また勉強し

ようかなとは思っています。特別養護老人ホームでのダブルワークも続けている。そこで経験する、より良いと思える介護の形はどんどん参考にしていきたいと言う。未来を支える若い介護士は、冷静そして熱心だった。

冷静さと熱い力と

有限会社キタムラ 有料デイサービスなかま所属
介護士 准看護師
柳川市出身。建築系の学校を卒業後、全国展開の飲食チェーンへ転職。Uターン後、家業である企業が運営する施設に勤めることに。

優駿

(33歳)

通所介護

清田 綾 (43歳)

やまなみ介護生活株式会社 介護空間エール所属
社会福祉士・介護福祉士 管理者 生活相談員
久留米市出身 小学2年生の時 父方の実家のある大牟田市へ福祉系大学を卒業後 接客業へルバへを経て現在の職場へ就職
忙しいさか間を縫って家族のために食事を作るのが最近の楽しみ。

心を繋ぐ介護士へ

私の挑戦

小春日和の陽気の下、現れたのはぽかぽかとした笑顔が印象的な清田さん。自身のことを“おっちょこちょい”だと言う彼女は社会福祉士と介護福祉士という2つの顔を持っている。子ども時代、両親が共働きで祖父母といつも一緒だったこと、地域活動に積極的に参加し周囲の高齢者がとても身近だったことなどが、「将来はおじいちゃん、おばあちゃんに関われる仕事がしたい」という願いにつながった。

高校の進路選択では、福祉の勉強をきちんとしてみたいという思いから福祉系の大学へ。社会福祉主事の資格をとった。その一方で人に関わる仕事全般への興味も尽きず、卒業後しばらく接客業を続けて結婚・出産を経て見つけたのがヘルパーの仕事だった。「週に2、3回で仕事自体も好きだったんですが、なかなか大変で。良くしてください方もいれば、拒絶される利用者さんもおられました。なんでこんな娘みたいな歳の子に面倒みてもらわんといかんって。その方はまだ50代後半だったんですが、それでも徐々にいろんな話をしてくださるようになりました。そうすると、実は息子さんから見放されてしまったような気持ちというのが分かってきたんです。私がこの仕事を辞めることになったときは、すごく泣かれてしまって、自分が冷たく当たったこととかもごめんねっておっしゃっていただけて。そこから母のいる大牟田に帰ってきて、今の事業所に勤めるようになりました」。

「大学で勉強もしたんですが、実際するのは全然違いました。関わりも1対1じゃない難しさがある。症状が様々な利用者さんたちが一緒に楽しんでいたようなものをどのようにしたらできるだろうかと日々悩んだりしました」。もちろん嬉しいことも沢山あった。「孫と話せるようで嬉しいとか、ここに来るのが今の唯一の楽しみだと言ってくださったり。病気で亡くなられた方のご家族から、誕生日の写真をご覧になって、母のこんな笑顔を家では見たことがなかったからすごく良かったですっておっしゃっていただいたり。そういう時はすごくやりがいっていうか、最後に関わることでできて良かったなと思います」。

清田さんに今後の展望を伺った。「実は祖母が癌で入院してたんです。その時、地域連携室の方との話でわからないことだったり疑問に思うことがたくさんあって。当時介護には関わっていただけ、社会福祉士の資格は持っていない。そんなこともきっかけで、社会福祉士の資格を取りました。だから、そういった視点というか、社会福祉士としてのスキルを還元していきたいですね」。

生まれ育った環境、介護の世界で会う様々な人間模様。そんな中で発揮される社会福祉士としての力。清田さんだからできるケアワークが、必要とする人にしっかりと繋ぎ止められることが願われる。

よ、その時がめっちゃなんか“帰らんで”ってなります(笑)」。でも、そんな不安な気持ちを気遣ってくれる先輩もいるのだそう。

将来は“介護福祉士”の資格を取って長く仕事がしたいと話す山口さん。「そして、いつかやっぱり旦那さんを見つけて子どもを産んで、お母さんになりたい。子どもは好きです」。

友だちと遊んだり、ショッピングやファッションが好き、仕事はまだただけどー生懸命、お世話が好きな18歳。彼女の未来は果てしない。

だったんですよ、ちょっと潔癖なところもあったので。でもやってみたら意外とすぐ慣れてしまって。自分でもびっくりしました」。食事介助や入浴介助なども経験した。利用者を丁寧に観察することで、スムーズに食事をしてもらえるようにもなった。入浴も「“疲れることなんてない”好きな仕事」だそう。通勤は就職前に取得した免許でマイカー通勤だ。今はまだ何事にも“一生懸命”だという山口さん。「もう本当にちょっとですけど、お年寄りの方に何かしてあげて、ありがとうって言ってもらえると嬉しいですよ」と語る。

しかし、そんな彼女がまだ苦手としているのが夜勤だ。「月に3、4回くらい。少なめな方なんですけどね。19時半までの人たちが帰ったら、もう夜勤2人だけになるんです

今の私

私の世界

高校では保育科を選択した。「その時はお兄ちゃんにもそろそろ子どもが生まれるみたいな時で。いとこもまだちっちゃかったんで、保育の方が自分が大人になった時も、なんかいいかなって思ったんです」。高校で習ったピアノは今も軽かったら弾けるとのこと。「でも、そのピアノが難しくてストレスになっちゃって。もう本当にギリギリでついていくような感じで、それが大学ではもっと難しくなってついていけなくなるんじゃないかって。だから保育で進学するんじゃないかって、高卒で資格がなくても就職ができる介護の道を選びました。両親も、自分が介護に興味があるのを知っていたから、良かったねっていう感じで」。

就職後、初めての仕事はオムツ交換だった。「やっぱり始める前は少し不安

「今年の4月にここで働き始めました」。そう話し始めたのは高校を卒業したばかりの山口芹果さん。夜勤はまだ不慣れで苦手だという18歳、どこにでもいるような十代の女の子だ。「結構、人見知りする方だと思うんですけど、なぜか人と関わったり、お世話したりするのが好きで」。そう続ける彼女がこの仕事に就きかけになったのは、中学生の頃の福祉体験の授業だった。「中2かなんかで行くんですけど、先生たちにあなたはここねって指定されて、それぞれの施設に行くんです。そこで折り紙を折ったりとかして。仕事っていう仕事はないんですけど、遊びみたいな感じで。それが楽しかったんですよ」。その時は教室で授業を受けるよりも楽しいという程度だった。

特別養護老人ホーム

山口 芹果 (18歳)

社会福祉法人福岡寺福祉会 延寿苑所屬
介護士
大牟田市出身。市内の高校を卒業後、現在の職場に就職。
休みの日は、友だちと遊びに行ったり、ショッピングしたりするのが好き。

HELLO WORLD

HEART TO HEART

川本さんは大きな乗り物が好きだ。かつては排気量が1300ccもあるバイクに乗っていたし、今も大型のミニバンで通勤している。「一人でバイクに跨って、阿蘇の草千里とかにツーリングに行っていました。寒い冬もお構いなしで、温かいダゴ汁とか食べたりですね」。

彼女が介護の世界に足を踏み入れたのはそれほど早い時期ではなかった。20歳で結婚し、1年ちょっとで離婚。大牟田に帰ると、できるだけ融通のきく臨時雇いの仕事を続けながら子育てを頑張った。しかし、一人で育てていくには何かやはり資格を身に付けた方が良く、子どもが小学校に上がると同時に看護学校へ入学した。「でも、すぐ葛藤があったんです。熱を出した病気の子を両親に預けて、何で自分だけ一人学校で他人の看護をしてるんだろうって。自分で自分の子どもを見たいけん、学校やめようかなと思ったことも何度もありました。母や父の協力があって学校を卒業できたので、本当に感謝です」。

卒業後、最初に勤務したのは精神科の病院だった。日々、採血であったり、注射であったり決められたことの繰り返し。そんな中、共に働く介護士に師長が「〇〇さんのご家族は何曜日に来ますとね?」と尋ねた。

介護士は間髪入れず「〇曜日です」と答えた。そのことに川本さんは衝撃を受けた。「自分は患者さんのことを何も知らない! 凄、羨ましい。」と。もっと患者と関係性を築きたい、人と人としての距離が近い仕事がしたい、その思いが介護の道へ進むきっかけとなった。

あるエピソードを教えていただいた。入院中にご主人を亡くしたある患者さん。認知症が進み寝たきりだったこともあり、ご家族はご主人が亡くなったことを伝えないままにいてることを選択した。しかし退院後に施設に入るとみるみると回復し別人のように。そこで、それまで黙っていたご家族から、やはり伝えた方が良くかもしれないと相談があった。川本さんもその通りだと感じ、亡くなったことをご家族の口から話してもらおうと、初めはショックで泣かれていたものの、受け入れた後は「墓参りに行きたい、夫と話したい」そう言われた。車椅子で遠路連れて行くにはハードルが高かった。しかし、川本さんは車椅子ごと乗ることができる車を手配、ご家族とともに墓参りに向かうことにした。「そうしたら凄く喜んでいただけたんです。良いところに眠らせてもらったねって。私はまだ行かんけん、あと10何年は生きないけんから待ってよって」。

「本人さんの願いを叶える事業所にしたいって私は思ってた」。川本さんは言う。「人が今生きていて、隣にいてっていうことは当たり前なことじゃないんだって思うんです」。川本さんが目指すのは、自分が認知症になった時に喜んで使いたいと思えるような場所だ。

「親を看取られたご家族が、ここで良かったです、私の時もここでお願いしますって言われるんです」。そんな場所を考え続けたい一。「もう、やりがいがいいです」。

老いは誰にでも訪れる。そうなった時、人はどんな場所でどんな形で人と共にあることが幸いなのか。自分の信じる道を、川本さんは走り続ける。

川本純子 (49歳)

小規模多機能ホーム

医療法人 静光園 白川病院 小規模多機能ホームひだまり所属
施設長・看護師
大牟田市出身。地元の短大を卒業後、結婚。子育てをしながら28歳で看護学校へ入学し看護師の資格を取得した。病院にて看護師を勤めた後、介護の世界へ。大牟田バイクやラグジュアリーミニバンなど大きな乗り物が好きな一面も。

老いは誰にでも
だから、幸せになれる場所へ

TOGETHER



人と向き合う喜び
開いた扉

訪問看護

鍬本 亜弥 (46歳)

合同会社 Leaf stone 訪問看護ステーション結〜musubi〜所属
看護師・管理者
大牟田市出身。高校在学中に准看護師の資格を取得。精神科・内科の病院に勤める傍ら正看護師の資格も取得する。長年勤めた病院を退職後、2022年、新たな気持ちで訪問看護の分野へ。

鍬本さんは訪問看護師、そして管理者で、仕事は様々な。自身も利用者の自宅へ訪問するが、管理者としてスタッフや業務の管理、経営や営業に関する仕事など多岐にわたる。事業所を上手にまわしながら、同時に色んなことを考えなくてはならない立場だ。多忙な毎日だが、やりたかった仕事でもあるという。

高校で准看護師の資格を取得し、精神科と内科のある病院で24年間働いた。「小さな頃からのことを言うと、小学6年生の頃、祖父ががん入院して毎週病院に面会に行っていたんです。祖父はそのまま亡くなってしまったんですが、それ以降、祖母との二人暮らし。その祖母も病院通いとかする中で、色々と不安なこともあって。こう

いう時どげんしたらいいとやろとか、そういうのを当時から中学生だった私に聞いてきたりして。それに答えられない自分がいる。それにしっかり答えられるような仕事って何だろうなって考えた時に、看護師だと思って。だんだんそっちの方向に気持ちが行った感じです。夜勤もある仕事、当時3歳だった子を育てながら正看護師の資格も取得した。

しかしその一方で、心の中にある気持ちが高まり続けていた。「もっと一人一人の患者さんに向き合っていきたい」。仕事の中で必然的に生まれるルーチンワーク的な働き方、それはワークライフバランスにも都合が良いものだったが、子育てにひと段落ついた今、本当にやりたいことをやりたい。

その気持ちで鍬本さんを動かした。44歳で長年勤めた病院を辞め、新しくスタートした訪問看護の事業所に転職したのだ。

今勤める訪問看護ステーション結〜musubi〜は、それから2つ目の新しい職場だ。「やっぱり訪問看護が良いですね!」と鍬本さん。「一人一人にしっかりと時間をかけて向き合える」。仕事の中で理不尽な扱いを受けることもあるそう。でも鍬本さんは動じない。「もう、どんな相手でもどんと来いですよ。掴まれたり水をかけられたり、色々体験してきたけど、病気が悪いんだからっていう。その人が悪いんじゃないって、病気が悪い。あくまでもその人の一部で、その人全体が悪いんじゃないって思うと、もう別に腹も立たない」。かつて精神科で患者

に向き合ってきた経験が生きる。

スタッフや会社のことも考える。「スタッフは4人しかいないんですけど、その4人で常に利用者さんについての情報共有をしています。誰が行っても利用者さんのことは全部把握できているというような形」。そのスタッフたちのモチベーション管理や経営管理。事業所の真ん中で目を配り、皆が幸せでいられる形づくりに余念がない。利用の相談は基本的に断らない。「会社を大きくしていきたいですね。皆様から信用していただける事業所になりたいと考えています。だから一緒に頑張ってくれる人も探しています。ちょっとでも興味があるんだったら話を聞きに来てもらいたいなって思っています」。

車いすや歩行器、介護ベッドなど福祉用具のレンタル・販売のほか、手すりの取り付けなど福祉用具の設置に伴う工事も請け負う「株式会社Saita」。斎田豪堅さんはこの会社の代表取締役だ。

以前は中古車販売店で働いていた斎田さん。「車好きが高じて仕事にしたんですが、結婚し子どもができると何ていうか…この仕事は子どもに自慢できるか、このままの自分でいいのかと考えるようになって。社会の役に立っているとより実感できる仕事に就きたいと思ったんです」。

なぜ福祉業界だったのか。それには、ケアマネジャーとして働く母の影響もあったようだ。「小学生の頃からよく職場に連れて

行ってもらって、レクリエーションに混じったり、食事の介助を手伝ったりしていました。その体験が根底にあるのかもしれない。介護職の人をすごく尊敬していたし、同時に僕にはとてもできないという思いもありました」。

地元の福祉用具事業所に転職するも、わずか1年たらずで独立・開業。29歳だった。「若気の至りってやつです(笑)。僕は利用者さんのためにもっと動けると、変な自信がそのときはあったんです」。

2年前には事務所を新しく構えた。「今も目の前の仕事をこなすことで手一杯」と、日々忙しく働く。目下の課題は仕事の効率化。「今の介護保険制度の仕組み上、必

要な書類が膨大で、作成にかなりの時間を要してしまう。忙しさに流されていないか、利用者としてしっかり向き合っているかと思うことも」。そんな自分を支えてくれるのもまた、利用者たちだという。「『トイレに1人で行けるようになった』『安心してお風呂に入れる』とか、できなかったことができるようになるのって、本当にうれしそう。ご本人やご家族の笑顔が、僕の何よりの喜びです」。休日返上で利用者宅へ工事に出掛けることも多いが、それも苦ではないようだ。

「仕事のパーセンテージが多くを占めていて、趣味といえるものもあまりない」という斎田さんの楽しみは、愛車の手入れ。「洗

車が好きで、半日くらいかけちゃう。時間かけすぎだと妻には怒られるんですが、細かいところまで気がになって(笑)。ストレス発散にもなるんですよ」。自宅周りの草刈りにも精を出す。「自分の庭もですけど、周辺の道もきれいにしておく近所からの印象もいいですから。よく見られたらいい、ただそれだけです」と照れ笑い。その丁寧で誠実な性格は仕事ぶりにも生かされているようだ。斎田さんは自身の仕事を「御用聞きみたいなもの」という。利用者と同じ目の高さで、相手の表情にも気を配りながら対話し、本当に必要なものを提案する。地域の介護専門職員の信頼も厚い。

子どもに自慢できる仕事になっていますか。「いやあ、どうかな…」斎田さんはしばらく考えて、こう答えた。「それは今も分かりませんが、“このままでいいのか”という以前のような迷いは全くないです。“どう頑張っていこうか”という思いしかない。やりがいのある仕事なのは確かです。力強い言葉だった。

ON THE WAY

福祉用具貸与

斎田 豪堅 (40歳)

株式会社Saita 代表取締役
福祉住環境コーディネーター2級
1984年生まれ 大牟田市出身。大牟田高等学校を卒業後、半導体製造業、中古車販売業を経て2010年福祉用具業界へ就職。2011年に独立。

このままの自分で
いいのか

「友だちに車椅子の子がいて一緒に遊んだり、介護や看護の仕事をしている親戚がいたり、環境の中で自然と介護への興味が湧いたような気がします」。大阪生まれ大牟田育ちの西田さんは33歳の介護福祉士。高校生の頃に実習に行き感じて「フレンドリーで仲の良さそうな明るい職場」が現在の職場だ。

「介護業界って大変って聞いていたんですが、あんまり苦痛には感じなかったです。支えていただいたっていうのもあると思うんですけど、もう覚えるのも必死だったしですね」。当初、会話が成り立たなかったり、急に立ち上がって動くことしたりと思いがけない現場に戸惑うことはあったが、“心が通ったと感じられる瞬間”は嬉しかった。

介護福祉士として14年目になる西田さん。中堅ならではの悩みもある。「指導したりとか色々通常の業務以外にも責任あ

る仕事っていうのが増えてきて、最初は自分が教わったことをそのまま伝えていくみたいなのがあったんですけど、その中で何か聞かれた時に、きちんと答えられるのになっていく疑問を感じたんです。レクリエーションするにしても、この体操したから何の意味があるんだ?みたいな感じで。毎日しなくちゃいけないっていうので今までやってきたんですけど、それに対して問いかけられた時に答えられる自分があるのになって」。『“もうちょっと勉強したい”って違う所に行った同僚がいたんです。私より歳下の方だったんですけど、でも私まだ30歳やんかって思ってた。まだ頑張らなかなって思ったりして。不安になって、まわりの仲間と、何か資格とか持ってます?って尋ねたら、意外と皆さん持ってた。自分

は介護福祉士を持っておけばいいかなって思ってたんですけど、これって何か時間を無

駄にしたのかも知れない。ちょっと勉強してみようかなって思ったんです」。西田さんにはその時も一つの学びがあった。「他所から来られた方がいて。それまで従来の考えに当たり前に従ってきたところがあったんですが、これからは私やさらに下の世代の若手がどんどん色んな考えを発信していかなきゃいけないのを聞いて。やっぱり他から来られた方っていうのはすごい刺激でした」。

介護予防アドバイザー。西田さんが取得した民間資格だ。「うちのデイケアでリハビリとかをどんどん頑張っていきたいって考えて取ったんです」。月に数回通う“ヨガ”でも、「こういう動きがいいんだとか、体操の組み立て方はこの順番でやった方がいいとか、色々そういう知識がもらえる」。

職場でお互いがコミュニケーションし合う場面においても議論を活発にできるよ

心がけるようになった。「どんどん他のスタッフさんに意見聞いたりとか、前よりできるようになってきたのかなって思います。全員とまではいかないんですけど、仕事の話の前よりできたりとか、フロアの会議の中で様々な意見できるようになってきてるのになって感じています」。家庭で子どもたちと接する中で気付くこともある。「勉強教えるってなった時に、聞いてくれないこととかあるんですけど、じゃあどう言えばいいのかと考えた時に、一緒に考えようみたいなニュアンスで行くんです。分かっている自分だけの都合でものごとを進めないで、一緒に寄り添っていかうかなって。でもこれって仕事も一緒なんじゃないかなとか思ったりですね」。

学んだことを職場や自分自身に生かす。西田さんが見つけた新しい自分だ。

気付きと

未来への学び

EVERYDAY

介護老人保健施設
西田 菜美 (33歳)

社会福祉法人甘木山学園
介護老人保健施設サンファミリー所属
介護福祉士
大牟田出身。両親の都合で5歳の頃に大牟田に移住し市内の高校を卒業。実習先だった現在の職場へ就職し14年目。

福田さんが介護の仕事をしているのは、かつての祖父母との暮らしがルーツなのかもしれない。学校から帰ると別棟に住む祖父母に帰宅したことを伝えることが日課だった。配達された牛乳をもらったり、烟で育てた野菜の料理を食べさせてくれたり、とても可愛がってくれたようだ。そういふ環境が福田さんの生き方に影響を与えたのか、高校卒業後は看護福祉系の大学へ進学することにした。

卒業後1年間、大学で事務員の仕事を
した。その後、玉名のデイサービス事業所へ
就職が決まり介護の道へ進んだ。小さな
事業所だったが、だからこそ細かなところ
まで様々に教えてもらった。そこで出会っ
た一つの考え方が今も福田さんを支える。
「最初に言われたのが『介護をさせてもらっ
てるっていう気持ち忘れちゃいかん』っ
ていうこと。それが原点ですね」。本当は自分
が一番されたくないこと、嫌なことなのに、
それををさせてもらっているのだという気
持ちを忘れてはいけない。福田さんが後進
にも必ず伝えるようにしている基本としての
考えだ。「一番初めの現場で、その考え方を
教わったっていうのは一つありがたいこと
だったかなと思います。比較的小さな現場
でーから教わるのができたんです。やっ
ぱり僕にとって運が良かったっていうかす
ね、ありがたかったです。そういうのがな
かったら、やりがいたかそいうのが掴めて
なかったら、もしかしたら違う業界に移っ
ていたかもしれない」。

これまでディサービスやデイケアなど異なる業態の事業所を経験してきた福田さん。それぞれの現場で身に付けた知識や技術も大きく役立っている。「初めはディサービスに勤めていて、その後デイケアに移りました。サービスとケアってどう違うかっていうところですね。やっぱりやってみたいとその辺はですね、実際体験しないとその辺は分らなかった」。

福田さんは今ショートステイの現場で生活相談員として日々活動している。ここでは仕事をしながら取得した社会福祉士の資格が生かされる。病院や介護施設、ご家族との連携や調整。病院の連携室で担当した元患者が、今の施設の利用者になる場合もある。「知っている人がいるのはやっぱり利用者さんにとっても都合が良いですね。いきなり知らんと行くよりは。生活相談員っていうことで担当者会議も行かせていただく時があって、やっぱりそういう方が来られた時に自分がいるとですね、『その節はお世話になりました』って言うのと、利用者さんも安心されるところがある。生活相談員としてそういうことがですね、やっぱり大事で」。

介護施設と一口に言っても、そこには様々な業態や規模、技術、資格、スタッフと千差万別。しかし見つめるのは人間だ。「学生さんが実習で来たり、新しい人が

入って来たりした時は、自分の原点となった
ところは話そうにしています。技術がうまい
に越したことはないし、レクがうまいに越し
たことはない。人を楽しませることができ
るっていうのに越したことはないんだけど、
やっぱり前提としてその人間的なところ、人
対人の話ですからね、全て」。福田さんの
気持ちの原点はずっと変わらないようだ。

短期入所生活介護

福田真一

(42歳)

私の原点

心に生きる

医療法人 完光会 今野病院 ショートステイこんの所属
社会福祉士・生活相談員
玉名市出身。高校卒業後、看護福祉系の大学へ進学。
卒業後、大学の事務員を経て玉名市のデイサービス事業所に就職。
その後デイクア等いくつかの事業所を経て現在の職場へ。

STARTING POINT

有明ケアサポート デイサービス花音所属
生活相談員・介護士
秋田県出身。グループホーム等を経て、現在はデイサービス事業所で生活相談員として働く。

介護士として

一番にできることを探して

ONLY ONE

通所介護

松崎 あずさ (54歳)

ディザービスで働く松崎さんのまわりは、利用者さんが作る作品で一杯だ。「カラオケ好きな方は歌っていただいたりとか、手編みでかごを作っていたいただいたりとか色々ですね。パスルが得意な方ですっと一生懸命される方もいらっしゃいますし、塗り絵がすごく上手な90代ぐらいの方もいらっしゃって、ちょっと見せたいぐらい。色を重ねてですね、もうそれを始めると本当に集中なさるんです。来ていただいている限りは楽しかったなと、来て良かったなと思っていた1日にしたいなっていうのはありますね」。

松崎さんが大切にしていること、それは利用者さんが日々の中で笑顔でいられるということ。「特別ではない笑顔というか、何かあった時に笑顔になるというよりは毎日繰り返される営みが自然に笑顔の多い時間になるというか、穏やかで幸せでいてもらえれば良いなと」。

松崎さんが30を過ぎた頃、新規立ち上げのグループホームに就職した。初めて務める介護の仕事は「思った以上に楽しかった」と言う。認知の方でもすぐ伝わるものは伝わるし、共有できるものは共有できる。だから認知の方が安心して楽しく毎日生活できる環境作りというか、そういう仕事は思った以上に楽しかった」そうだ。出産を機に夜勤専従の仕事もした。「夜勤業務っていうのはとても大変な仕事。何もなければ休んでもらっていいですよってこの現場でも言われますけど、何もない日なんて1日たりともない。安心して一晩ゆっくり休んでいただくのが業務ですけど、やっぱり看取りもありますし、それでもなんでもいうか1人業務の方が向いていると思うんで、好きだったんで」。

夜勤を続ける中で忘れられないエピソードがある。「もう看取らないといけなくてわかってる利用者さんがおられて、

でも夜って一人なので、いざとなったらもう訪問看護師さん頼みなんです。そうしたらある夜、その方の血中酸素がグッと落ちて、これは大変だと思って訪問看護師さんに電話したのですが、来ていただくまでにどんどん数値が下がってしまくてこれはもう、と思っていたんです。そうしたらその訪問看護師さんがベッドの上で1時間ぐらい汗だくで休みもせずにマッサージして、肺から痰を全部上げてくれたんです。残念ながら数週間後にはやっぱり看取りになってしまったんですけど、でもその姿を見た時にすごいと思いました。だから私が初めて看取りをさせていただいた時、もうちょっと何かできていたんじゃないかっていう思いもありました」。

「一介護士である自分に何ができるかと考えたとき、自分ができないことを助けてくれる人がいたり、訪問看護師さんとか、いろんな繋がりで一人の人が充実した時間

を過ごすことができるのかなと思います。私たちは看取るというよりは手前の仕事なので。本人さんが色んなことにまだ意欲があって、食べることもそうですし、笑うこと、歌うこと、話すこと、そういうことにやっぱり意欲を持って、楽しみを感じられる時間にできたらいいと思います。食事にしても、本当に美味いって食べられる方と、なんとか口に入れる食とでは違うので、やっぱり美味い美味いって言って食べられる方は強いです。今一緒に過ごせる時間を大切にしていきたいです。